

氏名	森 友紀恵
ヨミガナ	モリ ユキエ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第631号
学位授与年月日	令和2年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 包まれる空間認識－乱視野と輪郭の共生－ 〈作品〉 「狭間」「沿う」 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	手塚 雄二
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	佐藤 道信
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	吉村 誠司
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	宮北 千織
（副査）			（）	

（論文内容の要旨）

本論文では、幼い頃からメガネをかけてきたために発生し、自身の作品の根源でもある「乱視視界」と「矯正視界」の2つの視界について考察し、それによって「包まれる空間」を生み出そうとしている自身の創作について論述した。

私は幼い頃から、乱視・近視矯正のためにメガネをかけて生活している。そのため裸眼の状態とメガネの状態、2つの見え方が常に存在していた。裸眼の状態では物と物との境界が曖昧になり、染み広がって行くように見える。私にとって裸眼の空間は、物の輪郭がブレた「柔らかな視界」である。これは結露した窓ガラス越しに見る光景に似ており、幻のような雰囲気がある。この光景を私は昔から美しいと感じており、同時に柔らかな見え方に安心感も感じていた。それに対してメガネによって矯正された視界は、はっきりと物を捉える「輪郭の視界」である。ブレた視界が日常的に存在しているからこそ、「輪郭の視界」では視力異常のない人よりも、より形への意識が高まっていると私は考える。ここから「輪郭の視野」で行う素描は、情緒性を求めるよりも多くの形の種類をコレクトし、貯め込んでいくものとなった。そうして集められた多くの形と、乱視の視野の柔らかなブレのイメージが共存する場を、絵画によって表象、昇華させることが自身の作品制作の軸となった。

幼少期のお気に入りの遊びの一つに、風呂敷遊びがあった。いくつかの風呂敷を繋いで自身を包み、大きな繭になるのである。内部には、包まれる安堵感と外界から隔てられた孤独感とが共存する、不思議な空間が形成された。私はこの包まれる感覚を、無意識に自身の作品にも反映させていた。この風呂敷遊びの感覚が、2つの視野による捉え方と根底で類似していたからである。

「包まれる」という感覚は、教会内部の光の演出を狙った建築や、寺院の仏教思想の宇宙観を体現した構造にも感じられる。私の場合の「包まれる空間」は、どちらかといえば教会の乾燥した光の感覚より、寺院の仄暗い感覚の方が近い。また浄土宗の華やかな理想郷より、禅宗の水墨画のような大自然の中にポツンと人が佇む静かな空間の方が、より自身の作品世界に近いと言える。「包まれる空間」は、安心とともに孤独感にも繋がり、故にそれを表現することで自身の内的部分を外部に伝え、共感を求めているのかもしれない。

い。

本論文は 3 章で構成した。

第1章「2つの視界」では、自身の創作の発端と言える2つの見え方について考察した。第1節では裸眼の視界と矯正視力の視界を、それぞれ自作品と自身の体感を踏まえて述べ、第2節では視力異常があったとされる他の作家の作例を示し、正常視とは異なる見え方による創作の可能性を論じた。第3節では絵画以外のぼやけた表現について、映画やドラマの演出法と写真表現について述べた。

第2章「包まれる空間」では、2つの視界によって生まれる「包まれる空間」について論じた。第1節では、キリスト教の教会内部、仏教における空間演出の、両者の相違について述べ、また水墨画やインスタレーション作品の体感的空間感覚について考察した。第2節では、第1節で挙げた「空間」と、幼少期の自身の体験や自作品の「空間認識」との類似点と相違点を考察し、「包まれる空間」の創造手法について論じた。また、自身を作品内部の小動物に投影し、離人感による第2の「包まれる感覚」を喚起させようとしていることについて論じた。

第3章「提出作品」では、第1章と第2章を踏まえ、提出作品について解説した。第1節では和歌の「色無し草」という表現、視覚異常がなくても虹彩や経験の違いから生じる視界の違いについて着目し、色相よりも形の共感性が高いことを論じた。第2節では自身のモチーフについて述べ、第3節では提出作品について制作工程を踏まえて解説した。

#### (論文審査結果の要旨)

本論文は、幼少時から乱視・近視でぼやけて見えた裸眼の「柔らかい世界」(乱視視界)と、メガネを通してクリアに見える世界(矯正視界)を共存させ、「包まれる空間」を作り出そうとしている筆者の日本画創作論である。

二つの視界をもっていた筆者にとって、時折メガネをはずして「柔らかな世界」を覗くことは、密かな遊びだったらしい。その「柔らかな」空間が、「包まれる」空間となるのには、もう一つ筆者の幼少時の「風呂敷遊び」が原点にあるという。そして柔らかくに包まれる安堵感に、確かな存在感を同時に持たせるため、筆者は画面に矯正視界を併用し、両者の組み合わせとバランスに腐心している。

第1章「2つの視界」では、乱視・近視の仕組みを説明した上で、筆者が考える乱視・矯正視界が共存する理想的な作品例として、速水御舟の「萌芽」をあげる。また視覚異常が絵画表現に与えた影響を、モネの白内障やドガの「羞明」(まぶしがり症)にさぐり、モネの場合、白内障の時には全体が黄味がかって輪郭がぼやけていたのが、手術後は青視症で青が強くなること。ドガの場合は、普仏戦争で目を痛め、羞明(まぶしがり症)となって以後、室内主題のパステル画や、強く太い輪郭線が目立つようになることを指摘する。自身でも裸眼とメガネのそれぞれで、モチーフを見てスケッチした実例を示して解説しており、興味深い。19～20世紀の画家で視覚異常のあった人物は意外に多いが、それを自身を含めて具体的に分析、解説した本章は、大変興味深く説得力がある。また現代の映画や写真では、「フォーカス・トランジション」「ブル・フォーカス」「Bokeh(ボケ)」など、意図的に様々なボカシの技法が用いられていることを指摘する。

第2章「包まれる空間」では、筆者が“包まれている”と感じる場や空間の実例として、教会や寺院、水族館、ススキ野、インスタレーション(吉岡徳仁、内藤礼)、水墨画などをあげる。また筆者の原体験として、頭からすっぽりと風呂敷を被り、密閉ではない柔らかい布と光に包まれた「風呂敷遊び」をあげている。そして自作品で「包まれる空間」を表す工夫として、モチーフに近接した密集表現、輪郭を残して色で暈す矯正視界・乱視視界の併用、その中に自己投影として小動物を潜ませていることを説明する。

そして第3章「提出作品」で、「狭間」「沿う」の提出2作品について、蓮に包まれた前者、風にそよぐ柳に包まれた後者の制作過程を具体的に解説している。

視覚異常が表現として転化、昇華された事例としての意義もさることながら、それを客観的・正確に言語化して他者に伝えることはかなり難しいはずだ。本論文はその点、興味深い分析と説明が各所にあり、審査員からも高く評価された。反面、進行の遅れと論述不足も指摘されたが、学位論文として十分と判断され、審査会の承認を得た。

(作品審査結果の要旨)

森さんは、学部頃から淡い色調と堅実な技法によって手堅い作品を描いてきた。論文には、淡い表現の源には、近視という身体的なものの見え方があったと書かれている。かなりの下塗りを行い、シャープに物を表現した後、淡い表現になるように描かれた物を消していく。メガネをかけ鮮明に見える世界を、近視の裸眼で見た世界に変えていく。淡いけれどシャープな表現はその為である。

モチーフにおいても、よくある今までに描かれてきた世界を、森さんの切り口で新たな世界に変えて描いている。派手さはないが、良く考え抜かれた構成・狙い・品のある色調等、今までに有りそうで少し違う角度からみた、深い表現を試みている。

博士課程に出品した「狭間は」は、そんな彼女の表現がわかりやすい。蓮池を描く時、一般の人達が好む視点ではなく、茎に焦点を当てた作品にしている。上部に描かれた葉も、葉脈を強調した異様な世界とし、全体的に不思議な世界に描かれている。

技法的にも、描いては洗って消しを繰り返して、シャープでありながら柔らかく深みのある画面になっている。

「沿う」は柳の葉を、古典の絵巻物の文字のようにリズムカルな世界に変え、明暗の強弱により、抽象画のようにあらわそうとしている。修士での伴大納言絵巻模写の経験を活かし、彼女の絵画観と古典絵画の剥落等による見え方が、合わさった作品である。只、最終的には、「柳の形」を意識しすぎてリズム感がやや薄れた感がある。

他の作品についても

「雨音」・紫陽花と羽を休める雀を描くことにより、湿度や雨の気配を表現している。

「ゆらめき」・水槽の中を揺らぎの中にいる魚たちと水槽の外にいる人たちの時の流れの違いの感覚を表したいと思って描いている。

「映える」・池に映える蓮畑の光景が、現実とは異なる別の世界が水面に広がっているように感じ、その感覚を描いた。

等、彼女の作品は、見えたものをありのまま描かずに、その対象を感じさせようとしている。

そのものを描かず、現実を感じさせる作風は彼女自身の分身として二通りの見え方によって融合された作品である。彼女独自の世界を生み出し制作しており、博士号に値する。

これからも、更に深めて勉強してほしい。

(総合審査結果の要旨)

申請者は、幼い頃からメガネをかけてきた事によって発生した「乱視視界」と「矯正視界」の2つの視界について考察し、それによって「包まれる空間」を生み出そうとしている自身の創作について論じている。

まず、申請者は自身の裸眼の視界と矯正した視界を行き来する事で、視力異常がない人よりも形への意識が高まったとしている。次にモネやドガの視覚異常を例に挙げ、人それぞれ物の見え方が違うと述べる事で、見えている世界が第三者の世界とイコールではない事がわかる。つまり、決まった見え方はなく、真理は1つではないと言えるだろう。各々がそのように見えているはずだという前提のもと芸術が成り立っている事に問題提起した論文になっている。

申請者は乱視・近視がひどく、苦しみながら絵を描いている中で、ある種の快感を得ていると記述している。それをハンディキャップとしてとらえるのではなく、そのような苦しみから生まれる世界が芸術ではないだろうかと考えさせる。申請者の作品は一見すると形がないように見えるが、線できくられた形ではない独自の形があり、不鮮明な形の境界に生じた情感を大切に作品制作をしている。そこには人それぞれ違った世界が見えているのだから、決まった正解などないという価値観を感じさせ、“日本画”における解釈の

ひとつであると言える。作品から漂うある種のアバウトさは作者と鑑賞者との間に感性と感性との交流を生み、会話しているかのような感覚に陥る。絵画というのは、言い切るように提示するものではなく、感覚的な共有で良いという価値観を見出している。

以上のように、正しいものは本当にあるのかと問題提起し、自身の作品に反映させた本論文は学位論文として、審査員全員の協議の結果、合格と判定した。